
嫌がらせ屋

シュバルトバルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌がらせ屋

【Nコード】

N61410

【作者名】

シュバルトバルト

【あらすじ】

嫌がらせというものを稼業にしている族がけっこう大勢いる、という未確認情報がたった今寄せられたところだ。しかし、この界限ではさして珍しい話ではない。世の中にあ殺し屋もいる。殺すほどもない相手にはぶっ飛ばしや屋が適任だ。別れさせ屋だってえいれぱりストラ屋（ヘッドハンティングと見せかけて要らない給料泥棒を他社に売り飛ばす）だっているわけだし、当たり前もいれぱり当たられ屋もいる。薬屋（山手線各駅の心療内科に通院し、高値で売れる薬をゲットしまくる）もあるし、もしかすると世の中に〇〇

屋とつかねえ商売はねえかもしんねえな！。

あたりまえの日常、そのありふれた日常がある日を境にいつ頃に粉々に崩れ去ってしまうことがある。

これはそんな常軌を逸した体験をしたとある女性の物語です。

ほんの30分くらい前まで机の上にあったはずの物がなくなり、その30分後に床の中でそれが見つかる。

つい昨日まで使っていた物が翌日になると使えなくなっている。

しかし使えなくなったからといって壊されているわけではない。

自転車のライトのベルトが裏表逆にとりつけられていたり、差し替え式のドライバーのソケットをつけないままドライバーのナットが奥の奥まで押し込まれている。

見つかったかと思えばなくなり、なくなったかと思えば見つかり、ダメージを受けたものでも壊されたというわけでもない。

彼女が会社も行かず、この被害を食い止めようと部屋に閉じこもった毎日を過ごしていると、さすがに心配になったのか、父親が部屋のドアに鍵をつけてくれた。

それでもう大丈夫。誰もあたしの部屋に不法侵入できるものはいない。

だが、家の中だろうと外だろうとあたしの物はある一定の分別を

わきまえながら手当たり次第に荒らしまくられた。

愛車のバイクからは車体とボディーを固定するパーツがなくなり、ハンドルを固定するネジが何本か消えてなくなり、シートが破られ、ミラーのネジ穴がつぶされて、走るとハンドルがぶらつき、ミラーが道路に落っこちる。

そして奇遇とは奇怪なもので、バイク屋に行つてそのバイクを直してもらつたその晩、なくなったはずのそのパーツがひょっこり部屋の中から見つかるのだ。

見つかったのはいいのだが、またその一部なり全部なりがすぐになくなつてしまうのである。

しかし前述したようにダメージはかなり負つたが壊されたわけではない。

右ミラーが健在ならバイクは走らせられるし、盗難されたのはネジ2本とボディーの固定パーツ数品。

重要な品物や多額の金品が盗まれたわけでもない。

これでは警察署に被害届を出しても自分でボケてやつてしまったのではないかと勘ぐられるのが落ちだ。

同居する家族は、あたしが「あれない。これがない。得体の知れない組織につけねらわれている！」とわめきたてていたので気が狂ってしまったのかと思つて薬をもらつてきた。

友人に相談しても誰もまともにとりあつてくれる人はいなかった。

「そうか元カレに話を聞いてもらおう」と半年も前に失業したことで見限って自分の方から別れ話を切りだした、恨みこそあれ恩などこれっぽちもない相手に助けをこおう、なんて虫が良すぎるかしら。と元カレのことが思いをよぎったそのとき、ふあつとあることに思いいった。

そういえば以前からあたしの家に出入りしていたのは彼だけだったし、解放的な両親は何も言わないので彼はこの家によく泊まりに来たことがある。

そのうえ、記憶の隅に追いやってしまったことだが、よくいっしょにお風呂に入ったことさえあった。

そして、その翌日あたしが机の引き出しを開けてみると中が荒らされている形跡があったことを

女性はその引き出しを開けて隈なく中を探ってみた。

不審なものといえば家の合鍵だった。さっそくそれで玄関の扉を開けようとしても微妙に開けられない。

見たところ自宅の本鍵とまったく同じ形をしているのにうまく具合に開けられない。これは似ているが合鍵じゃない。

これは合鍵の合鍵だ。

それは父親の言葉だった。

ためしに同じ場所に置いた部屋の合鍵でも開けられるかどうかどう

か試してみた。

やっぱり微妙に開けられない。

合鍵の合鍵を作るなんて芸当はあたしたち一家を除けば彼しかできはしない。

なぜなら、彼はあたしが家のどこに鍵を置いておくのかを知っている数少ない住人の1人だったのである。

だからこそ、あたしと同じ屋根の下に住む住人たちの行動をすべて知っているのだ。

彼は知っている。

父が何時に起床して出勤して退勤して帰宅し、愛犬の散歩に行き、ビールを飲んでテレビを見、入浴して就寝するのか。

母が何時に起床して炊事洗濯掃除を行い、近所の知り合いとお茶会し、買い物を済ませて帰宅し、入浴して就寝するのか。

あたしが何時に起床して家事手伝いをし、病院に通って薬局に行き、役所に出向いて帰宅し、入浴して就寝するのか。

だから全員の予定表を作れば今誰が何時に何処にいて何をしているかがおおよそ見当がつくのである。

だから家宅侵入することなんてそんなに難しいことじゃないんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6141o/>

嫌がらせ屋

2010年11月12日22時12分発行